

Title	QOLD評価測定尺度に関する基礎研究 (VII)
Author(s)	丸山, 久美子
Citation	聖学院大学論叢,19(2) : 49-60
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=54
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

Q O L D 評価測定尺度に関する基礎的研究 (VII)

— Q O L 測定尺度は青年の実存的痛みを測定できるか —

丸 山 久美子

A study of the scaling of life and death (VII)

— Does QOL scaling measure existential anxiety within youth ? —

Kumiko MARUYAMA

Generally, QOL scaling is an ill-defined term today. Recently, WHO has placed special emphasis on spirituality (the so-called spiritual existential attitude). However, since an attempt is being made to measure something that is ill-defined, unobservable and latent in QOL scaling, it can only be inferred that the instrument is valid only insofar as it correlates a spiritual existential attitude with other observable behavior.

Since 1997, the author has studied the problem of how to make a QOLD scale consisting of the intensity of latent anxiety toward death within youth (especially university students). The inevitable death of all persons poses a serious challenge to the meaningfulness of human existence.

The purpose of this study is to make a QOLD scale for especially university students majoring in social welfare. Hypothetical space is considered and one-dimensional scaling is found to include excellent welfare for people on a medium scale. What remains to be discussed is the problem of this scaling with validity from viewpoints in the field of statistical psychological matter.

Key words: Psycheache, Time series, QOL Scaling, Existence, Existential Psychology

はじめに

人間は一生の間に多くの痛ましい体験を通して抜き差しならない逆境に追い込まれたり、場合によってはどうしても回避できない切迫した極限状態に陥ったりすることがある。不治の病を宣告されたときの絶望的な痛みや苦しみ、愛するものを突然事故や自殺で失ったときの対象喪失の痛み、

自己の存在ゆえに他者が苦しむのを見なければならぬとき、自己の存在に全く生きる意味を見出せなくなった時のうつ病的感覚など、このような極限状況に立たされたときに味わう人間の苦しみの状況をドイツの精神医学者で、実存的哲学者のカール・ヤスパース (K.Yaspers, 1883-1969, 注1) は「限界状況」と命名した。ヤスパースは人生において、このような限界状況をもたらす主な原因を精神的葛藤、死、不慮の事故と罪悪感をあげた。その他、多くの実存主義哲学者は「死と裏切り」(ガブリエル・マルセル)、「死と他者」(ジャン・ポール・サルトル) をあげ、いずれも人間関係の中で生じてくる痛みや苦しみを取り上げている。また、ヤスパースは「限界状況」、或いは「二律背反的状况」におかれた人間の反応には3つの種類があるという。即ち、1) 不決断、不確実および全能力の麻痺によって破滅する、2) 妥協、あきらめまたは自殺の道を選ぶことによって状況と真正面から対決する事を回避する、3) 「統一への意志」と「形而上学的なものへの志向」を絶えず新たにすることによって状況を克服し、再生への力を獲得する。

神谷美恵子は岡山県の瀬戸内海にある小さな島の療養所にある国立ライ療養所長島愛生園で1963年、一連の精神医学的調査を行い、ライ病患者の限界状況の処置症例を観察記録した。Kというライ病患者は19歳でライ発症、3年間大学病院へ通院するものの、完治したように見えたライ病が3年後に再発し、長島愛生園に入所した。しかし、神道の宗教的理由から治療を拒み、断食を行い、神の声を聞き、幻覚・妄想状態で肉体的衰弱のうちに肺病で死亡した。再三再四、自殺を試みるが、「お前は卑怯じゃないか」という神の声が聞こえて、自殺を思いとどまるものの、拒食、拒薬により35歳で衰弱死した。彼の極限状況の詳細な分析が行われている。ヤスパースの分類による3番目の「形而上学的なものへの志向」は新たな再生への道を準備するものではなかった。それは、拒食と拒薬からくる宗教的観念によるものであるが、統合失調症の発症からくる幻覚・妄想様症状によって一層症状回復が遅れてしまったことに原因があると分析している。このような症例からすれば、患者本人の置かれている限界状況は特殊なものである。宗教学者の岸本英夫は本人自身ががんとの10年間に亘る闘病の中で、生命の極限状態を「生命飢餓状態」といい、生物学者の柳沢桂子は長い原因不明の病魔との闘いで常に生命の極限状態に陥り、様々な既存の宗教を求め、遂にドイツの神学者で、ナチス・ヒトラーに処刑される間の2年間の獄中日記から自らの思想を編み出したディートリッヒ・ボンフェッファアの「神の前に、神と共に、神なしで生きる」神学に到達した。死を生きるための再生への道筋で出会う形而上学的志向の典型である。

死に至る病といわれているがん末期患者の極限状況の研究は、この種の極限状況を厳密に観察研究することに重点が置かれ、Q O L 測定尺度の中でも特にスピリチュアル・ペインといわれる霊的痛みや苦しみをいかにして測定するかを研究の俎上にあげている。しかし、この種の決定的なQ O L 測定尺度はまだ見当たらない。死に至る病を病んでいる患者にQ O L 測定尺度で自分の現在の苦悶に該当する項目の評定を実行してもらうことは、極めて困難である上、医師や看護師などの医療関係従事者は研究重視のためのデータづくりは到底許可するべくもない。なぜ、医療関連従事者は

研究重視に拒否反応を示し、それにこだわり続けるのだろうか。患者のプライバシーに神経質になる現在の社会風潮の中では、QOL測定尺度で患者の極限的苦悶を測定することは不可能に近い。

現代青年の実存的苦痛に関する測定

本研究において、取り上げるのは青年の実存的痛みの原因をいかにして測定するかに絞られる。特に、青年期における心と体の発達途上での軋轢から、自らの存在の意義を見失いそうになったり、自己の存在の証明を果たせなくなり、その狭間で生ずる苦悶の末に、ほんの些細なきっかけから自死を余儀なくされたり、実存的痛みから希死念慮を抱くなどの限界状況の測定をQOL測定尺度によって測定し、この種の限界状況を乗り越えるにはどうすればよいかを考察する。

他者から与えられる「いじめ」や「虐待」に相当する激烈な精神の痛みから自殺念慮を試みるのが現代社会で話題になっている。もっと、成長すれば、たいしたことのない他者からの言動が、心の奥深くに突き刺さり、もはや生きてゆけない、自己の存在の無価値感にさいなまれて、あけなく自殺してしまう事が頻繁に起っている。学校教育における「いじめ」による自殺が社会問題化することの意味を考えると、今日の青年の教育環境や周辺事情がことさら混濁した状況になっていることに気づく。

実存的痛みは人間存在の根源的な問題である。ヤスパースは「これは経験的心理学を越え」た主題であるとしており、精神病理学を取り扱うときには避けて通れない問題であるという。このような極限状況が精神病理学的現象を引き起こすからである。統合失調症の引き金は青年期に起り、何らかの状況で実存的痛みを経験することによって自殺はもとより、精神病症状を発症する。さらにまた、この状況は「人間の可能性の源泉」をあらわし、この種の危機に直面した人間を救い、彼らの生を新たな次元に再生し、統一することを意味している。したがって、青年期に訪れるこの危機的状況に如何に介入して、救い出すことが出来るのかを問わなければならない。もし、限界状況に対する精神病理的反応の特徴を調査分析することが出来るならば、人間性を形成する隠された深淵を発見し、そこに光を与えることが出来るだろう。また、何らかの宗教的な世界観なり、価値観を問いかけ、人間存在の内面的深淵について、多くのことを理解することが出来るであろう。

本研究は過去4年間の人間福祉学部学ぶ大学生の実存的痛みと希死念慮に関する時系列分析である。果たして、この種の問題に従来のQOL測定尺度が貢献できるのかについて検討してみよう。

研究目的：「生と死の質」に関する現代青年の実存的痛みについて、感情と欲求の認知構造を分析し、苦痛の様相を検討しながら、QOL測定尺度における「死」、「靈性」がどのように関連しているのかを2003年から2006年の4年間にわたるデータをもとにして時系列的研究を行う。

実存的苦痛に関する定義：実存的痛みを精神の痛み、心の痛み、苦痛、疼き、悲惨の感じを表す、いわゆる、サイキエイク (psyche ache) と定義する。この場合のサイキエイクは「恥、惨めさ、罪深さ、悲しみ、悲惨、老いることへの恐れ、死の不安」などの不安感情を意味する。

苦痛と関連する感情の質問内容：

私の苦痛は以下のような感情と関係しています。該当するものに3つ丸をつけてください。

1：捨てられる恐れ、2：無力感、3：怒り、4：悲嘆、5：反発、6：苦痛、7：誰も助けてくれない
悲しみ、8：悲哀、9：不安、10：希望のなさ、11：空虚感、12：自己嫌悪、13：混乱、14：恥、
15：嫌悪、16：絶望、17：不足感、18：恐怖、19：嫉妬、20：無価値感、21：失敗、22：孤独、
23：恐れ、24：その他

精神的苦痛を測定するための評価尺度：

私の過去最悪の精神苦痛は以下のような欲求項目と関連しています。5段階評定尺度上に丸をつけてください。1：最も当てはまる、,,,,,,、5：最も当てはまらない。

2003年度：

1：困難なことをやり遂げたい、2：愛されたい、3：友人とサークルに加わりたい、4：反対する人を負かしたい、5：社会の制約からの自由、6：過去の失敗を埋め合わせたい、
7：他人から自分を守りたい、8：他人に影響を与え支配したい、9：注目されたい、
10：痛みや苦しみを受けたくない、11：自分の空間を持っていたい、12：他人を育てたり、世話をしたい、13：物事を秩序立てたい、14：楽しいことをしたい、15：世話を受けたい、16：物事を理解したい、17：危険な思いをしたくない。

2004年度—2006年度：

1：社会の制約からの自由、2：他人から自分を守りたい、3：他人に影響を与え、支配したい、4：注目されたい、5：痛みや苦しみを受けたくない、6：自分の空間を持っていたい、7：他人を育てたり、世話をしたい、8：楽しいことをしたい、9：物事を理解したい、10：危険な思いをしたくない。

被調査者：埼玉県内の大学で人間福祉学科に所属する男女大学生

2003年度 女子：88名、男子：104名、合計：192名

2004年度 女子：68名、男子：115名、合計：183名

2005年度 女子：48名、男子：52名、合計：100名

2006年度 女子：46名、男子：54名、合計：100名

調査日時：毎年10月—11月の秋学期（「心理学」、または「人間関係論」の授業時）

結果と考察

表1は精神的苦痛と結びつく感情を24項目から3つ選んだ結果の度数の占有率を示したものである。また、それらを図示したのが図1である。占有率の高い順に6位まで示すとその年毎の青年の特徴が明らかになる。2003年から2006年の4年間に青年は何らかの意味で漠然とした不安を抱えている。2004年だけ、自己嫌悪の占有率が位置を占めるが2位は不安であり、2004年、2006年共に自己嫌悪が2位となる。2003年は自己嫌悪が3位になり、これは2004年と順位が入れ替わって悲しみが2位となる。これらの結果を一望すると、2005年と2006年になると青年の精神的苦痛の様相が若干異なって見える。無力感や絶望感が上位を占めるようになり、次第に青年が社会全体に対して消極的な態度を示すようになってきている。青年期特有の怒りや攻撃的な態度が薄れ、2004年の捨てられる恐れという極めて幼児性の強い未分化な社会的態度の発生から次第に無力感が強くなってきたことを表している。

表1 精神的苦痛と結びつく感情の順位（占有率）

順位	2003年		2004年		2005年		2006年	
1	不安	34%	不安	38%	自己嫌悪	22%	不安	38%
2	悲しみ	30%	自己嫌悪	32%	不安	19%	自己嫌悪	30%
3	自己嫌悪	27%	悲しみ	31%	絶望	18%	孤独	28%
4	孤独	24%	孤独	24%	悲しみ	18%	無力感	19%
5	絶望	21%	無力感	20%	無力感	17%	悲しみ	17%
6	怒り	20%	捨てられる恐れ	18%	孤独	15%	絶望	16%

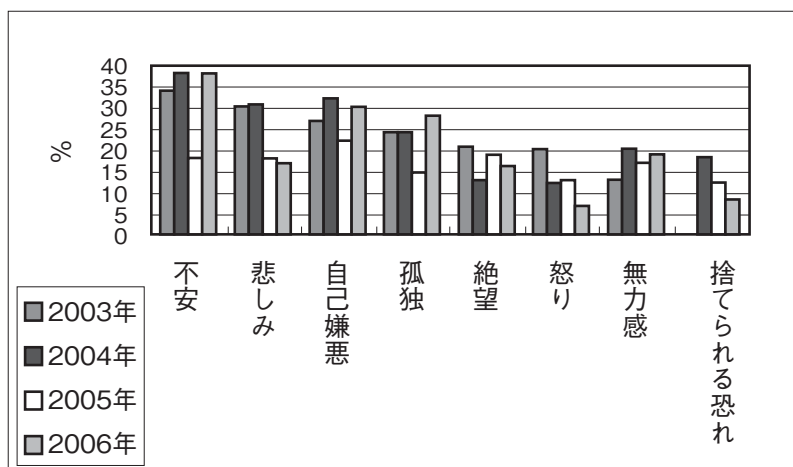


図1. 精神的苦痛と結びつく感情

このような精神的苦痛を抱いた青年たちの実存的痛みの具体的な内容は以下に示すとおりである。

2003年における青年たちのはこれまでの苦痛の経験の内容は「クラス内の人間関係」、「いじめ」、「ペットの死」、「失恋」、「両親の離婚」、「重度の疾患（アトピー性皮膚炎）」によるものである。総括すると、彼らは多くの友人関係のトラブル、いじめ、友人の死（自殺）、両親の離婚や自殺など、現在社会問題となっている社会現象に結びついた問題に精神的苦痛を感じて悩んでいたことが理解された。彼らはこのような具体的な悩みを抱きながら、自分が現在置かれている状態を次のように表現した。

2003年の結果で特筆すべき内容は、心を手で締め付けられるような感じ、自分が世界から必要とされないという、身体を引き千切られる感じ、透明人間に殺されそうな感じ、戦争でたった一人生き残ったような深い孤独感、拷問を受けているような痛み、閉じ込められた箱の中からどうやって出ようかともがく息苦しさの感じ、などである。イメージが極めて豊富であることは特筆すべきであろう。しかし、2004年になると内容が平板になるが、これらもかなり特筆すべきである。即ち、使われなくなった商品、割れたグラス、冷蔵庫の中になんと入れられればなしの牛乳、迷子の犬、雨に濡れた野良犬、寝不足の犬、踏み潰された虫けら、紐でつながれた動物、浦島太郎を乗せた亀（いじめられていた）、穴の空いたコップに注がれた水、路傍に転がった石、屋上に一人ぼつんと立っている自分、などである。2005年は一段と些細なことに拘りながら、深く傷ついている状況がうかがわれる。即ち、心に穴が開いた感じ、迷子・闇・踏みつけられた雑草、羽のない鳥、マンホール、大切なものをなくした子供、捨てられた子犬、ホチキスで間違っ指を刺した感じ、置き去りにされた歯車、操り人形、暗い出口の見えない空間を歩いている、大きな家の中に一人ぼっち、などである。2006年になると更に身近な生活の中に見える小さな出来事が自分の精神的苦痛を表現している事象となる。即ち、針が心に刺さる感じ、常に背中に刃物を突きつけられているような苦痛、孤独な人間、放置されたごみ、さびしいウサギ、穢れた人形、枯れそうな花、海に残された浮き輪、無駄に使われる鼻紙、出口のない迷路、砂時計、などである。4年間に共通している青年の実存的痛みは、出口のない暗い空間のような何もない場所から逃れようとする足掻きである。まだ十分に精神的に独立していない孤独な感情がいわれのない不安や悲しみを助長し、出口のない部屋の中で戸惑っている自己の存在は、サルトルがいみじくも描いた「存在と無」に代表される問題と同質である。ここに、繊細な神経の持ち主には自殺念慮の介在が予想される。

続いて、図2－図5まではそれぞれ、これらの精神的苦痛に伴う欲求との関係を測定尺度で測定した結果を2次元空間布置図である。2003年度は17項目の布置図であったが、それから7項目を削除して10項目を測定尺度として、因子分析した結果である。共通性（communality estimates）から、この中で「他人を育てたり、世話をしたい」という項目は異質であることがわかる。したがって、測定尺度は9項目に削除されたほうが好ましい。これらの結果を図6に望ましい福祉人（親和性）を中点としてプラスとマイナスの側面に並べてみた。人間福祉学科に学ぶ青年たちの実存的痛みの

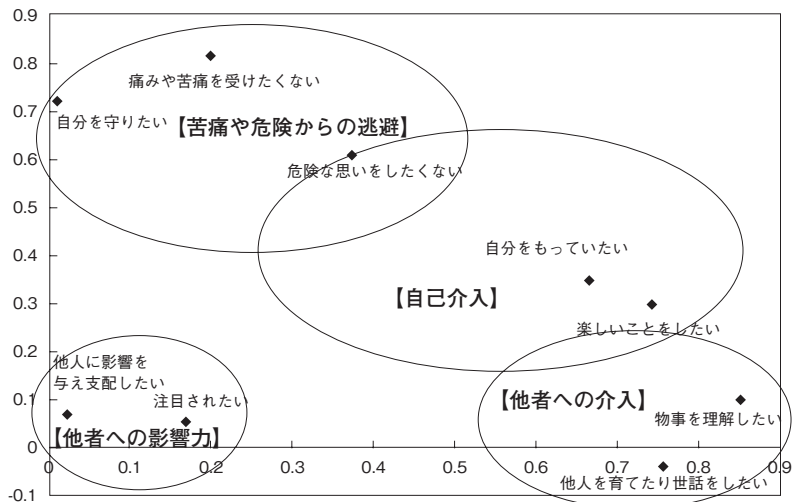


図2. 実存的痛みがひき起こす事項の2次元布置図 (1-2)
2003年

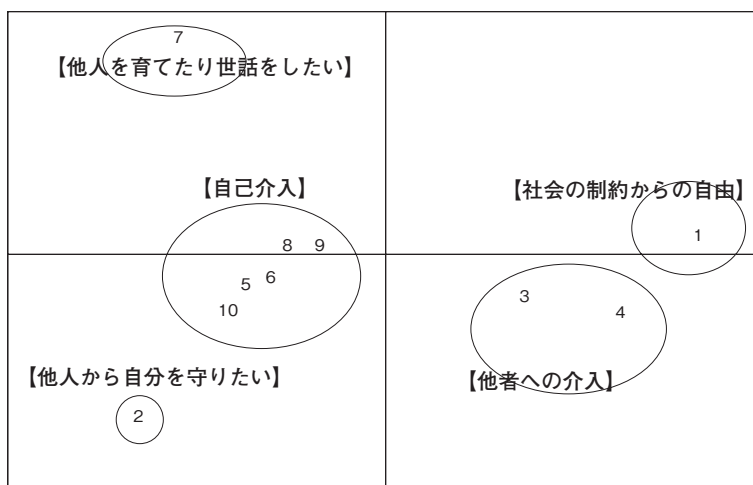


図3. 実存的痛みがひき起こす事項の2次元布置図 (1-2)
2004年

QOL D評価測定尺度に関する基礎的研究 (Ⅶ)

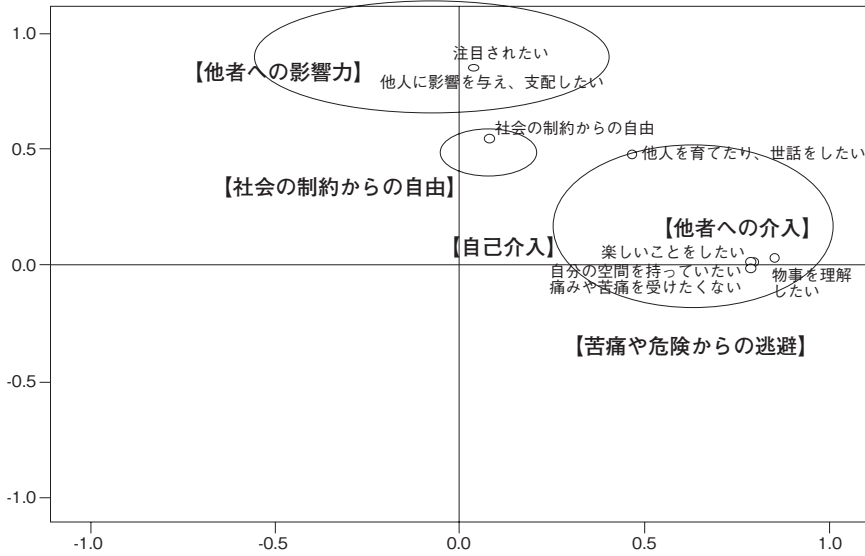


図 4. 実存的痛みがひきおこす事項の 2次元布置図 (1-2)

2005年

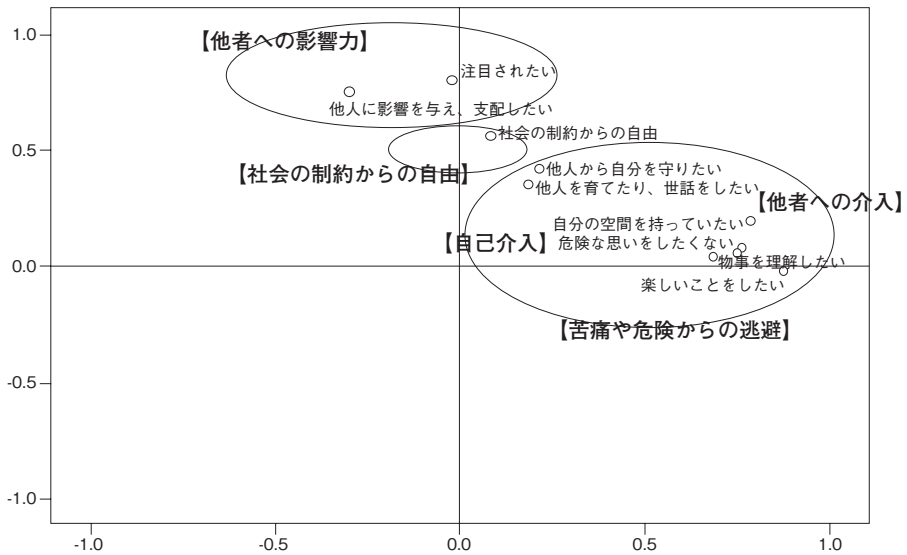


図 5. 実存的痛みがひきおこす事項の 2次元布置図 (1-2)

2006年

表2 2006年のデータ因子負荷量

	成分			共通性
	1	2	3	
楽しいことをしたい	.885	-.012	.002	.783
自分の空間を持っていたい	.803	.211	.026	.690
危険な思いをしたくない	.745	-.003	.219	.603
物事を理解したい	.718	.120	-.144	.550
痛みや苦痛を受けたくない	.690	-.152	.492	.741
注目されたい	-.025	.740	.325	.653
社会の制約からの自由	.131	.690	-.135	.511
他人に影響を与え、支配したい	-.320	.670	.355	.678
他人を育てたり、世話をしたい	.225	.462	-.137	.283
他人から自分を守りたい	.110	.082	.865	.766

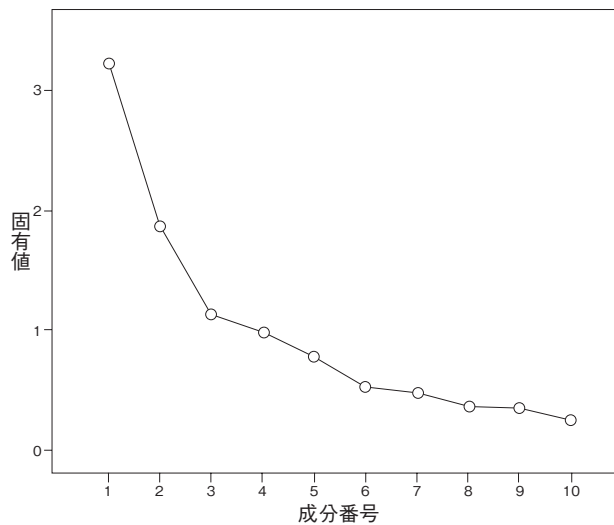


図6. 固有値の低減状態

結果をこのような仮想空間に2次元平面空間に描くと図7のようになる。このような空間図の中で、福祉人として常に他者介入や時としてはパターンリズム（父子性）を発揮しながら、福祉の場に臨むことは孤独な作業であり、常に自己批判との闘いである。一向に出口の見えない部屋の一角でもがき苦しむ自分の姿を垣間見ることである。この現実を十分に踏まえながら、彼らが成長して、福祉の現場で活躍することが期待される。

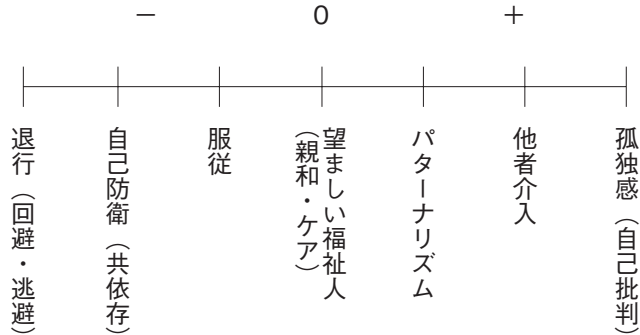


図7. 望ましい福祉人を中点とする1次元尺度構成図

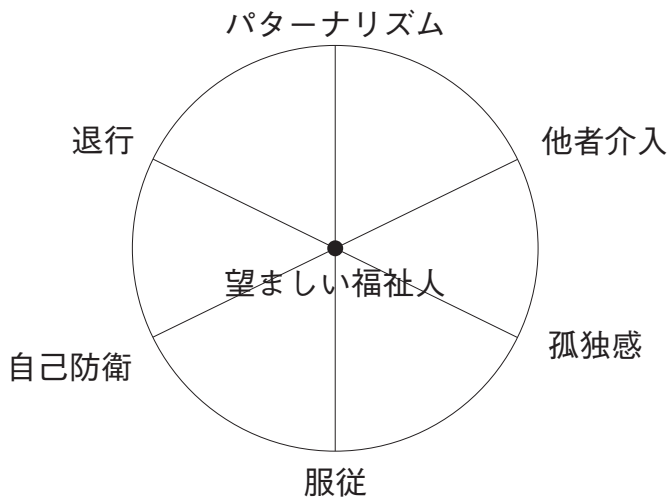


図8. 望ましい福祉人を中点とする2次元仮想空間図

総合考察

2003年から2006年までの時系列調査で、青年の実存的苦痛がいかなるものであるのかを検討してきた。彼らはその年特有の社会的出来事に左右されながら、自分の中に危機感を温存している。時系列的にその動向は次第に現実味を帯び、社会的危機状況を今そこに潜んでいる危機的現実と重ね合わせている。年経る毎に、青年たちの実存的苦痛は次第に社会の状況と重なってくる。次第に青年は悲しみよりも自己嫌悪に脅かされる。この事態は急激に生起した青少年の肉親殺しや児童虐待、はたまた老人虐待につながる多くの暴力事件に青年たちの精神的苦痛が増幅されていることを示している。彼らは苦痛から逃れるために自殺念慮ではなく、他殺念慮に駆り立てられるのである。現代社会における青少年犯罪の様相はこの現実を反映しているものと思われ、その結果、現代青年の

内面生活における自己弱体化が急激に増加してくるものと推察される。

注

1 ヤスパース自身の限界状況は彼自身の人生を規定した「病氣」である。ヤスパースは次のように自分の病氣について述べている。「私自身にとって病氣は一つの運命であった。乳児のときから私は健康であったためしがなかった。しかも私が苦しんだ身体の弱さたるや、非常に恵まれた生活環境下だけで、仕事、それも純粋に精神的な仕事に限って実現が許される、といった程度であった。私の全生涯の多くは、身体の不調の影に蔽われている。はっきりした記憶はごく幼い頃まで、身体の故障と結びついている。私がある場所や状況を思い浮かべると、決まってこの故障・からだの感じ・無力・むなしい努力といった苦痛を連想せずには居られない」。

医学生になってから書き残した自己観察には、長時間持続する消耗感、急速な易疲労感、時折減弱する音声、まれに失声症、軽度の運動失調、眼の内直筋の弱さ、したがって外斜視と複視、出現箇所を変えての筋痙攣、あくび発作、頭部熱感、頸および腹大動脈の鼓動、赤面、物怖じ、精神的エネルギーの欠如、悪臭症、起立時眩暈、眼の奥と鼻根部での頭痛等々、かなり心身症的、ないし神経症的なものがふくまれており、こうした観察が記録されたこと自体が、当時の健康状態の悪化のための心身症であると思わせる。しかし、彼の持病は気管支拡張症と二次的心不全である。気管支拡張症の特徴は大量の喀痰である。したがって、病氣対策は1) 規則正しく喀痰し、分泌物貯蔵を可及的に避ける、2) 感冒にかからないようにする、3) 心臓に負担をかけないこと、である。必然的に他人からの訪問は制限され、時間的に短くせざるを得ない。「ヤスパースは人と会わぬ高慢な男」との世評は、一見堂々たる美丈夫の彼の風貌のみを知って、こうした健康状態を知らない人々に定着していたそうである。もし彼が健康で頑丈な身体を持っていたら、必ず別世界に活動分野を求めたに違いない、病弱だったおかげで、精神病理学上の屈指の業績と世界哲学史上不滅の研究を成就することが出来た。

30歳で膨大な研究書「精神病理学総論」を上梓し、70歳で「哲学的自伝」を出版したが、その後も「シェリングー偉大さと宿命」72歳、「大哲人たち」74歳、「現代の政治意識—原爆と人間の将来」75歳、「啓示に面しての哲学的信仰」79歳、「ニコラス・グザース」81歳などの多彩な著書を発表している。

78歳の最終講義で彼は「私の父親は90歳まで生きた。人間はアルコールやタバコをやらなければ長生きできるものだ。私も父の年まで生きるのだ」と冗談に言っていたが、86歳で逝去した。原因は脳梗塞であった。

参考文献

- ボンフェッファー・D., ベートゲ・E. 編 1988 ボンフェッファー獄中書簡集『抵抗と信従』, 村上伸訳, 新教出版社
- Jaspers, K 1913 Allgemeine Psychopathologie. (ヤスパース精神病理学総論, 1920, 西方四方訳, みすず書房)
- 平山正実 1998 “実存すること”と“癒すこと”, 実存思想協会編「実存思想論集, 死生」, 理想社
- 神谷恵美子 1981 精神医学研究 I 限界状況における人間の存在—ライ療養所における1妄想症例の人間学的分析—, みすず書房
- 岸本英夫 1973 死を見つめる心—ガンとたたかった十年間—, 講談社文庫
- 北森嘉蔵 1954 神の痛みの神学 教文館
- 丸山久美子・ヘンドリック・ビベラー 1996 日独大学生の「生と死」への態度に関する比較研究, 聖学院大学論叢, 第8巻第2号, 191-222
- Maruyama, K 1999 A study of scaling of life and death- A Comparative study on students toward life and death-, Journal of Seigakuin University, Vol.11 NO.4, 359-375
- 丸山久美子 1997 Q O L D 評価測定尺度に関する基礎的研究 (I), 聖学院大学論叢, 第9巻第2号,

Q O L D 評価測定尺度に関する基礎的研究 (VII)

139-156

- 丸山久美子 2001 Q O L D 評価測定尺度に関する基礎的研究 (III) —Spiritual pain の測定可能性—, 聖学院大学論叢, 第14巻第1号, 101-118
- 丸山久美子 2002 Q O L D 評価測定尺度に関する基礎的研究 (V) —Q O L 測定尺度の信頼性と妥当性—, 聖学院大学論叢, 第15巻第1号, 75-87
- 丸山久美子 2004 Q O L D 評価測定尺度に関する基礎的研究 (VI) —青年の実存的痛みに関する認知構造—, 聖学院大学論叢, 第18巻第2号, 93-102
- 丸山久美子, 木下玄太, 加藤淳 2006 青年の実存的痛みに関する時系列的研究, 日本行動計量学会第34回大会抄録集, 84-85
- 丸山久美子 2006 医療心理学特論—生と死の心理学—, プレーン出版
- 丸山久美子 2006 臨床社会心理学特論—人間関係の社会病理—, プレーン出版
- Meninger, K 1938 Man against himself: Harcourt, (カール・メニンジャー, おのれに背くもの, 草野栄三郎訳, 1963, 教文館)
- 小川圭治 1979 人類の知的遺産 48, 「キルケゴール」, 講談社
- Schneider, K 1950, Klinische Psychopathologie, (シュナイダー臨床精神病理学, 平井静也訳, 文光堂)
- 柳沢桂子 2005 いのちの日記—神の前に, 神と共に, 神なしで生きる—, 小学館